

信州読書会 YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書 モリエール 『人間ざらい』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

YouTubeLive <https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 <https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 244 回のツイキャス読書会の課題図書は、モリエールの『人間ざらい』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『きみは、わしがモリエールの着想を盗んだというのか？』

『盗みなさいとすすめているんですよ、ムッシュ』（サバチニ スカラムーシュより）

（引用はじめ）

「モリエールが躊躇せずにやったこと、偉大な作家が躊躇せずにやらぬものはなかったことを悪事だというとき、あなたはモリエールの死後の名声、舞台の最大の華、わが国の最大の華を侮辱しているのです。モリエールが、かつて着想において独創的であろうと苦心したと思っはなりません。かれが書いた劇の筋は、かれ以前に、だれも書いたことがないと思っはなりません（中略）モリエールは古い筋をとって、自分自身の言葉に書きなおしました。ぼくが、あなたにすすめていることは、このことなのです」（ラファエル・サバチニ スカラムーシュ 東京創元社）

（引用おわり）

サバチニの「スカラムーシュ」はフランス大革命の初期に、レーヌで暴動を扇動した主人公アンドレが、逃亡中に旅芸人の一座の中に潜伏する小説である。

アンドレらが演ずるのはコンメディア・デッラルテ（仮面を使用したイタリアの即興演劇）であり、「スカラムーシュ」とはそのストックキャラクターである。

ウィキペディアのストックキャラクターの項では、スター・システムとの関連も含めて書かれており、劇作について考えるとき重要な示唆を与えてくれるものである。

YouTube でコンメディア・デッラルテの実演映像を見ると、仮面を使用する俳優の滑稽な演技が強調されたものを確認できる。

対してモリエールの喜劇は仮面を使用した即興ではなく、河出書房版の解説によれば、「人間嫌い」は三一一致の法則を守り、十二脚の韻文（アレクサンドラン）で書かれている。

同じモリエール作でも「ドン・ジュアン」は三一一致の法則を破り、散文で書かれたものとのことである。

韻文と散文の違いは日本語訳で読んでもよくわからないので、YouTube で実演を確認した。

アンドレが言うように

人間の歩みとは、形式と模倣の蓄積であり、それこそが文化であると知らなければならない。

（おわり）

神輿だワッショイ

いま頑張って課題図書に挙げられているジェーン・オースティン「高慢と偏見」を読んでいます、上流階級の皆さんの長ったらしい講釈、おべっか、その中に込められている嫌味、マウント、さっきまで話をしていた相手がなくなった途端始まる非難の数々・・・「人間ざらい」のなかにもしっかりと展開されておりました。これらを読んだらプロレタリアートの私も人間ざらいに陥ります。

そんな中でアルセストは夏目漱石の坊ちゃんみたいで見ていて「大丈夫か？ おい」と心配になりました。

そう言えば私は「坊ちゃん」の感想文を赤シャツ目線で書きました。こんなやつが職場にいたらめんどくせえ、ウザイ、あんな世間知らずの集団の結束を乱す独善的な奴には関わりたくない、近寄らないでおこう、と。アルセストに対しても然り。

だからと言って私はアルセストのような人とも、アルセストが許せない嘘ばかりつく人達と接触を避けるため樽の中に籠るでもなく、犀の角のように1人林の中を行くわけでもなく。

「お前のような傍観者気取りが一番許せない！」とアルセストや坊ちゃんの批判の対象に私はなるのでしょうか。

それからセリメーヌについて。彼女は神輿に担がれ、最後は神輿にかけられた梯子を外された哀れな人だなと思いました。

(引用はじめ)

ほぼ以上のごときが日本ファシズム支配の歴大なる「無責任の体系」の素描である。いま一度ふりかえってそのなかに躍った政治的人間像を抽出してみるならば、そこにはほぼ三つの基本的類型が見出される。

一は「神輿」であり 二は「役人」であり 三は「無法者」(或は「浪人」)である。

神輿は「権威」を、役人は「権力」を、浪人は「暴力」をそれぞれ代表する。国家秩序における地位と合法的権力からいえば「神輿」は最上に位し、「無法者」は最下位に位置する。

(岩波文庫 丸山眞男「超国家主義の論理と心理 他八篇 日本のファシズム」より)

(引用おわり)

どこの国でも神輿を担ぐ人、担がれる人、無法者がいて権力構造が維持されているのでしょうか。会社や地域、メディアのなかにも「人間ざらい」のような、丸山眞男が指摘したような構造があるのでしょうか。

神輿から降ろされた人が何度も担ぎ上げられる、なんてことはあるのでしょうか？ ワッショイ、ワッショイ！以上

(おわり)

『人間ざらい』 感想文

私も10代の頃なら、もしかしたらアルセストの気持ちも少しは分かったかもしれないけど、もうそんな純粋な気持ちが無くなってしまったのか、難しかったです。

でも、セリメーヌとアルシノエの嫌味合戦はすごく面白かったです。

もし、自分が友達のアシノエに頼んでもないのにあんなにズグズグ言われたら、怯んでしまって、すごく傷ついて大泣きしてしまうと思う。

友達だと思っていたのに、日頃からそんな事を思っていたのかと思うと、はらわた煮えくり返ると同時にかなり辛いと思う。

でも、セリメーヌは言われた事の倍以上を言い返していて、全く負けていないところがたくましくて、少し羨ましいと思いました。

セリメーヌとアシノエみたいな感じなら、もう絶交したほうが良いような気もするけど、普通ならこんなに言いたいことを言ってしまったら、絶交するかもしれないけど、女性特有の性質で、二、三日経つと何事も無かったかのように接するのかもしれないなと思いました。

二人のように、相手を打ちのめすぐらいに言い合うのは、現実ではなかなか出来ないからきつと心の中で言うか、影で言うかになると思うから、どっちも嫌だなと思うけど、私にもそういう所あるなと、思うと嫌だなと思いました。

人の事が嫌いだと思う気持ちを突き詰めると自分の事も嫌いだという風になるのかなと思うと、なんだか難しい。

一回読んだだけでは理解できないお話だなと思いました。でも何度も読むのもなかなか辛い作品かもしれないなと思いました。

(おわり)

人間大好き

貴族社会の軋轢にうんざりしている情熱的な青年の悲恋が描かれるこの作品だが、彼がクソ真面目であればあるほど、その姿が滑稽に映ってしまう。

この作品は貴族社会が全盛の時代に、一部の貴族への痛烈な批判を含んでいる。ともすれば上映禁止になってもおかしくない作品だが、滑稽な青年に批判を語らせることによって、批判性を和らげることに成功している。見事な手法だと思う。

当時の大衆には受けが良くなかったそうだが、心ある貴族たち(おそらく彼らも貴族社会の欺瞞にうんざりしていたのだろう)に受け入れられたとのことだ。

(引用はじめ)

いまこの国じゃあ、自分が考えていることをうまく隠せる才能のない人間は、安息の地を見つけるのはむずかしいくらいですよ。(第三幕 第五場 アルセストの台詞から引用)

(引用おわり)

現代の日本の世間でも同じだ。事実をありのまま述べるのは、余計な失言らしい……。

だが、アルセストのように、悪いのは世間のヤツらだ！
と奮ずるのもいいが、それだけでは危険な自己正当化に繋がっていつてしまわないだろうか？

しかし、おべっかを使ったり影で悪口を言ったりするのはおよそ人間らしからぬ(いや、だからこそ人間らしいのかも…)行為だ。

それらを忌み嫌うとしたら、本当の人間をアルセストは「好き」ということになるだろう。

世の中の人間を嫌うのではなく、それらが行う自己正当化や欺瞞をその人を尊重した上で、批判していかなくてはいけないのだと思う。(それは、とても難しいと思う…アルセストも出来ていない)

それらの欺瞞が少しでも減じて行けば、日本の世間も良くなっていくのかも知れないと思った。

(おわり)

樽の中まで 45 分

『人間ざらい』を再読して、落語の『三枚起請』を思い出してしまった。
遊女が、何人もの客と起請文(結婚の約束)を交わして騙すという落語である。

しかし、モリエールの喜劇が、落語と違うのは、アルセストに個性＝主体性があることだ。

(引用はじめ)

アルセスト 心の中では、あなたのなされたことを何によらず大目に見ることができるでしょう。人間が弱ければこそその振る舞いだ、現代の悪癖があなたの若いところにつけ込んだうえのことだと、見すごす気にもなるでしょう。しかしそれも、一切の人間から離れようとしている僕の計画に同意してくださらなければだめです。これから行って住もうと思っている人里はなれたところへ僕といっしょに行く決心をしてくださらなければだめです。(略)

セリメーヌ でもまだ年寄りでもないのに、世捨人になるのでしょうか。あなたのおっしゃるその人里はなれたところへ埋まりにゆくのでしょうか。

アルセスト 僕と同じ真剣な心になって下さるんだったら、世間はどうでもかまわないじゃありませんか。するとあなたは、僕と同じ心にはなってくさならいんですね。

セリメーヌ 二十歳そこらの者には、恐ろしくてなりませんわ。そんなところ。偉くも強くもない女ですもの、そんな決心つきそうにもありませんわ。

(第五幕 第四場 P.149～150)

(引用おわり)

落語の登場人物は、世間に埋没している。世間体、義理、心にもないお世辞、人間を手段としてみる計算高さ、欺瞞に満ちた人間関係などに雁字搦めの落語の世界の住人たちは、アルセストのような潔癖でもって、世間を徹底的に批判することはない。なぜなら、落語の住人には、個性＝主体性がないからだ。

アルセストほど、主体性を重んずる人は、できることなら出家すべきである。
あるいはディオゲネスのように、樽の中で暮らすべきだ。

しかし、彼は、セリメーヌに恋することで、世間に未練を感じて、苦しんでいる。
でもって、彼女と人里はなれたところで人生をやり直すことを強いるのである。

しかし、魚に水が必要であるように、女性には人間関係が必要である。セリメーヌは欺瞞によって彼女自身なのである。偉くも強くもなく、決心がつきかねるから、彼女は、世間になんの疑問もなく存在できるのだ。三枚起請の花魁、喜瀬川と同じである。セリメーヌの人格的弱さを、アルセストが批判したって、彼女は、変わりようがない。

アルセストは、セリメーヌに主体性を持つように強いている。彼と駆け落ちすれば、現代の悪癖から手を切って、セリメーヌの個性を実現できているのだ。

でも、そんなこと本気でしたら彼女は、精神的に参ってしまうだろう。

人里をはなれても、それは単なる逃避である。主体性は世間の中でしか発揮されない。世間と没交渉の主体性というのは、主体性でもなんでもない。世間が、沼地だからこそ、そこで足掻くための主体性が逆に際立つのだ。

世間にいながら樽の中に住むのは、一つの主体性のあり方である。

人里はなれて、世間ともはなれれば、生きながらに自分の主体性を殺すことになる。

アルセストは、夏目漱石の坊ちゃんに似ていないこともないが、坊ちゃんが赤シャツを殴って教師を辞めたような単純な勧善懲悪ではすまない主体性を持っている。

アルセストはセリメーヌを隠遁生活に誘うのだが、それはもっともっと世間の地獄で苦しむためだ。

苦しみの中でしか主体性が表れてこないという矛盾が、人を狂気の淵まで誘う。

ドストエフスキーの登場人物、例えばラスコーニコフだったら、その苦悩の果てに信仰の形式を得るだろう。

フランス貴族の社交生活は、欺瞞を欺瞞のまま形式化して、アルセストの苦悩を笑い飛ばすほど、スレている。

アルセストは、自分で自分を突き放すわけではない。

その境地＝樽の中まであと一步である。

その一步が、彼には遠い。

(おわり)